

## 保育者養成校の学生を対象としたダンス指導の困難さと改善方法

— A大学1年生を中心に —

福武幸世<sup>1)</sup>\*・芝崎美和<sup>1)</sup>・渡部昌史<sup>1)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

本研究では、保育者を目指す大学生50名を対象に、ダンス（リズムダンス、創作ダンス）指導に関する自記式質問紙調査を行い、ダンス指導の困難さと改善方法についての認識に、ダンス経験の有無による違いが見られるかについて、テキストマイニングを用いて検討した。その結果、ダンス経験有り群は、子どもの年齢、発達段階、特性に応じたダンスの動きの指導や振り付けの考案など技術的な部分に困難さを抱えており、子どもたちの動きなどを学習することで改善しようとしていた。一方、ダンス経験無し群は、ダンスに対して自信がなく、ダンス自体について考えることに困難さを抱えており、まず自分自身がダンスを楽しむこと、そして子どもたちの発達などを学習することで困難さを克服しようとしていた。以上より、ダンス指導における困難さと改善方法についての認識に、ダンス経験の有無による違いが見られるという本研究結果を踏まえ、保育者養成校におけるダンス指導に関する授業展開の在り方について協議をした。

(キーワード) ダンス指導、保育者養成、困難さ、改善方法、テキストマイニング

### 1. 目的

2018年4月に施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が挙げられている<sup>1) 2) 3)</sup>。10項目の中には、「豊かな感性と表現」という項目が設けられ、この時期に育てることの重要性が強調されている<sup>4)</sup>。幼児期の「豊かな感性と表現」は、「保育内容」として設定されている領域「表現」などで示されているように、就学前施設での生活の様々な場面で美しいものや心を動かす出来事に触れてイメージを豊かにし、表現に関わる経験を積み重ねたり、楽しさを味わったりしながら、育まれていく。

幼稚園教育要領等における領域「表現」では、その内容として「(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」<sup>5)</sup>ことがあげられており、身体を媒介とした表現（以下、身体表現とする）についても触れられている。片山ら（2000）によると、保育や教育における表現活動の目的とは、「感性や創造性の育成にあり、言葉や身体活動（歌う・弾く・描く・動く等々）などの媒体により、独自の方法で表現する活動である」という<sup>6)</sup>。つまり、身体表現は、就学前の子どもたちにとって、自己を表現することを体験し学んでいく大切な活動の1つ

であるといえる。

このようなことを踏まえ、多くの保育者養成校の身体表現に関するシラバスでは、領域「表現」の内容を理解し、知識と技能を身につけ、保育者としての役割を考えることを到達目標に掲げている。その背景には、保育者は、一人一人の子どもたちが、のびのびと自己表現をしていけるように導いていかななくてはならないという保育者養成校の思いがある。

さらに、保育者養成校において、表現活動の中でもダンスに焦点化した科目が設置されるケースでは、科目における習得内容は保育内容「身体表現」を基礎としながらも、ダンスに特化した視点から、子ども達の自己表現を高める学習内容が配置されている。実際の保育現場でも、言葉や身体などを媒体とした表現活動（歌う・弾く・描く・動く等々）の一環として、日常生活でのリズム運動や運動会での創作ダンスといったダンスに関連する表現活動が多く展開されており、保育学生には、表現者の立場だけでなく、指導者の立場からも、ダンス表現に関する知識や技能を習得することが求められている。しかしながら、実際には、ダンスの指導に関して、指導の難しさ、苦手意識や力量不足感を抱く保育者、教師は少なくない<sup>7) 8)</sup>。「何をどのように指導したら良いかわからない」といった学習内容の不明確さ、指導の方法論上の問題<sup>9)</sup>、「生徒が動かない、自分で動いて見せられない」といったダンス指導に対する消極性<sup>10)</sup>、生徒のレベルやニーズに合わせた指導の困難さ<sup>11)</sup>

\*連絡先：福武幸世 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

はその一例である。同様のことが保育学生についても当てはまり、多くの保育学生が身体表現の指導に対して不安感を持っているという<sup>12)13)</sup>。以上のことから、身体表現は様々な分野があるが、ダンス指導に着目した。ダンス活動によって、子どもたちの感性や創造性を高めるためには、まず、養成段階において、学生自身が子どものダンス指導に対する不安や困難さを払拭することが肝要なのではないだろうか。特にダンスを経験したことがない人は、ダンス指導に対する不安が高いと考えられる。しかしながら、保育者養成校において、学生のダンス経験の有無によるダンス指導の困難さを調査し、その改善方法を合わせて検討した研究は行われていない。

そこで、本研究では、身体表現の中でも特にダンスに焦点化した科目を設置している保育者養成校の学生を対象に、ダンス（リズムダンス、創作ダンス）指導に関する自記式質問紙調査を行い、ダンス指導の困難さと改善方法についての認識に、ダンス経験の有無による違いがみられるかを明らかにすることを目的とする。保育を担う学生自身が、ダンス指導のどのような点に不安や困難さを抱えており、自身の困難さを乗り越えるための改善方法をどのように認識しているのかについて検討することは、保育者養成校のダンス指導の一助になると考えられる。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

対象者は、2021年にA大学の保育者養成校に在籍する1年生50人である。1年生を対象とした理由は、まだ身体表現（ダンス）に関する授業を本格的に受けておらず、その時点でどのようなことに不安を感じ、対応しようと考えているのか把握するためである。

### 2. 手続き

自記式質問紙による一斉調査を実施した。回収率は100%であった。

### 3. 質問紙の構成

質問紙は、性別、年齢、ダンス経験の有無についての質問と、ダンス指導の困難さおよび改善方法についての質問で構成されている。

#### 1) ダンス指導の困難さ

ダンス指導に関する指導の困難さについては、「あなたは将来、保育現場でダンス（リズムダンス、創作ダンス）指導をすることは難しいと感じますか。どちらかに○をつけてください。」と質問し、「はい」「いいえ」の選択を求めた。続いて、「どのようなことに困難さを感じますか。詳細に記述してください。」と尋ね、自由記述で回答を求め

た。

#### 2) ダンス指導に関する指導の改善方法

ダンス指導に関する指導の改善方法については、「困難さを乗り越えるためにどのような改善方法があると思いますか。」と質問し、自由記述で回答を求めた。

## 4. 倫理的配慮

調査にあたり、調査対象者に対して、調査への回答は任意であること、回答の辞退または途中での協力撤回は可能であること、研究への参加・不参加による成績への影響や不利益を被ることは一切ないことを説明した。回答するアンケートの表紙に本研究に対して同意するか否かのチェック記入を求め、調査を開始した。本研究は、新見公立大学倫理審査委員会において承認を得た（承認番号：220）。

## III. 結果

分析には、テキストマイニングフリーソフトウェアのKH Corder (<http://koichi.nihon.to/psnl/>)を使用した。分析は、対象者全体、ダンス経験有り群、ダンス経験無し群で行った。形態素解析によって、分析対象データから多く出現していた単語を抽出した。さらに、共起ネットワーク分析により、単語間の共起関係を検討した。

### 1. ダンス経験の有無

ダンス経験については、経験有り群8名、経験無し群41名、未回答1名であった。未回答の1名については、群比較を行う以降の分析から除外した。

### 2. ダンス経験群別にみた抽出語数

ダンス（リズムダンス、創作ダンス）指導における困難さに関する回答について分析したところ、総抽出語数は1,224であった。困難さの改善方法に関する回答に関しては、総抽出語数が863であった。

次に、ダンス経験の有無によって総抽出語数に違いが見られるかを確認したところ、ダンス経験有り群では、ダンス指導の困難さに関しては227語、困難さの改善方法に関しては176語が抽出された。ダンス経験無し群では、ダンス指導の困難さに関しては997語、困難さの改善方法に関しては684語が抽出された。

### 3. 困難さを構成する要素

(1) 形態素解析と共起ネットワークを用いた困難さの構造の解明

表1に将来、保育現場でダンス（リズムダンス、創作ダンス）指導において、どのようなことに困難さを感じるかについての形態素解析の結果を示した。出現回数が多かつ

たのは、1位「ダンス」(41回)、2位「自分」(24回)、3位「子ども」(21回)であった(表1)。

さらに、抽出された語の関連性について、共起ネットワークを用いて確認したところ、「自分」は「自身、苦手」と繋がっていた(図1)。これらの語は、「自分自身がダンスをするのが苦手だからうまく踊れるか自信がない」「自分がダンスに苦手意識があるため、ダンスを手本として踊ること」などといった形で、自分の中の苦手意識、演示に対する困難さを指摘する回答の中で用いられていた。また、「子ども」は「指導」に繋がっており、「ダンス経験も指導経験もないので、自分が経験不足なことを、子どもに教える自信がないです」「自分がダンスが苦手だから、子どもたちに伝わるように指導すること」「子どもを指導する

表 1. 困難さの頻出20語

順位	抽出語	出現回数
1	ダンス	41
2	自分	24
3	子ども	21
4	苦手	15
5	教える	13
6	難しい	12
7	指導	10
7	動き	10
7	分かる	10
10	感じる	9
11	子	8
11	自身	8
11	創作	8
14	覚える	6
14	経験	6
14	考える	6
14	思う	6
18	自信	5
18	振り	5
18	人	5

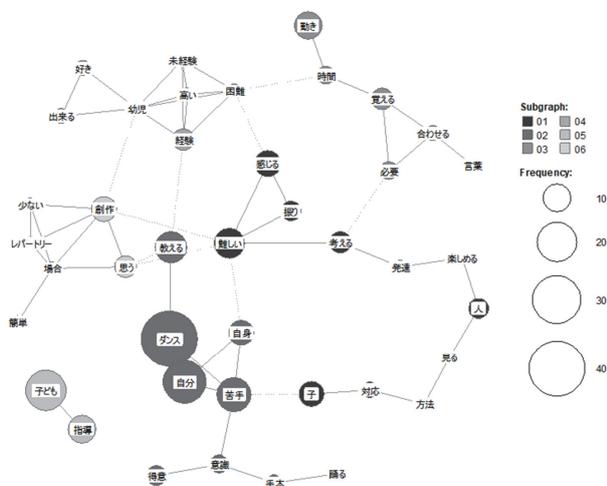


図 1. 困難さの共起ネットワーク

時間がかかる」などの記述がなされており、子どもへの指導に対する自信の無さや指導技術についての困難さを表す回答の中で用いられていた。

(2) ダンス経験による困難さの構造の違い

1) ダンス経験有り群

ダンス経験有り群において、出現回数が多かったのは、1位「ダンス」(6回)、2位「動き」(5回)、「難しい」(5回)であった(表2)。続いて、抽出された語の関連性について、共起ネットワークを用いた分析を行った結果、「動き」は「ダンス」、「難しい」は「考える」「振り」「感じる」に繋がっていることが分かった(図2)。これらの語は、子どもの年齢、発達段階、特性に応じたダンスの動きの指導や振り付けの考案についての困難さを示す回答に

表 2. 困難さの頻出の頻出20語 (ダンス経験有り群)

順位	抽出語	出現回数
1	ダンス	6
2	動き	5
2	難しい	5
4	子ども	4
5	覚える	3
5	感じる	3
5	考える	3
5	振り	3
5	人	3
10	教える	2
10	苦手	2
10	合わせる	2
10	子	2
10	指導	2
10	自分	2
10	得意	2
17	それぞれ	1
17	スピード	1
17	リズム	1
17	レベル	1

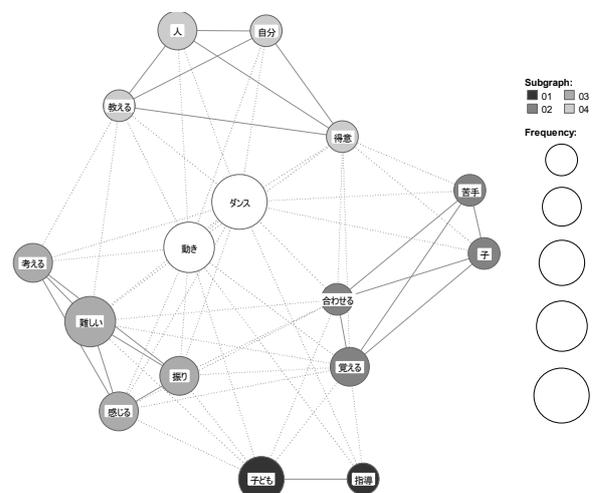


図 2. 困難さの共起ネットワーク (ダンス経験有り群)

において多くみられ、具体的には、「その年齢によったり、個人で難しいと感じる動きはちがうので、みんなで踊るダンスの振りを考える時にどのような振りにすればよいか考えるのが難しそうだと感じた」「リズムに合わせた振り付けをすること、覚えることが小さい子どもにとって難しいと感じるから。」「発達によってそれぞれのダンスを考え、教えたりすることは難しいと思います。」といった記述がみられた。

2) ダンス経験無し群

一方、ダンス経験無し群において、出現回数が多かったのは、1位「ダンス」(35回)、2位「自分」(22回)、3位「子ども」(17回)であった(表3)。抽出された語の関連性を明らかにするために、共起ネットワークを用いて検討

表3. 困難さの頻出20語 (ダンス経験無し群)

順位	抽出語	出現回数
1	ダンス	35
2	自分	22
3	子ども	17
4	苦手	13
5	教える	11
6	分かる	10
7	指導	8
7	自身	8
9	創作	7
9	難しい	7
11	感じる	6
11	経験	6
11	子	6
14	思う	5
14	自信	5
14	動き	5
17	伝わる	4
18	リズム	3
18	意識	3
18	覚える	3

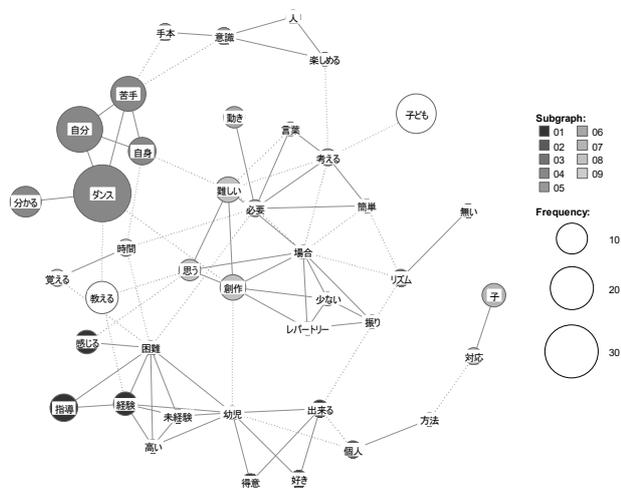


図3. 困難さの共起ネットワーク (ダンス経験無し群)

したところ「自分」は「苦手」「自身」、「子ども」は「考える」と繋がっていた(図3)。これらの語は、自分自身の苦手意識が子どもに伝わる不安や、子どもの発達に応じた指導技術や指導方法を考えることについての困難さを示す回答で多くみられた。「教える立場になる自分がダンスが苦手」「自分がダンスが得意ではないので、苦手という意識が子どもに伝わってしまったり、教えるときに不格好になったりして、良い手本となれなさそうに感じる。」「子どもの発達に応じた振り付けを考えたり、曲をえらんたりすること」「言葉や視覚だけで吸収することは、子どもにとって難しいと考える。音楽に合わせて、特定の動きをできるようにするためには、様々な段階を踏んでたくさんの練習期間を設ける必要がある。」などの記述がみられた。

4. 改善方法を構成する要素

(1) 形態素解析と共起ネットワークによる改善方法の構造の解明

表4に困難さを乗り越えるためにどのような改善方法があるのかについての全体の形態素解析の結果を示した。出現回数が多かったのは、1位「ダンス」(24回)、2位「子ども」(14回)、3位「自分」(10回)であった。抽出された語の関連性について、共起ネットワークを用いた分析を行ったところ、「自分」は「楽しむ」、「子ども」は「動き」「発達」などに繋がっていた(図4)。これらの語は、自分自身がダンスを楽しむようになることと、大学で子どもの発達を学ぶことが改善策であるという回答の中でみられ、「まずは自分がダンスを楽しむ。自分がダンスの楽しさを教わる。」「大学の授業で良く学ぶ、楽しむ、自分がダンスを好きになることから始める」「発達について知

表4. 改善方法の頻出20語

順位	抽出語	出現回数
1	ダンス	24
2	子ども	14
3	自分	10
4	教える	8
4	考える	8
4	動き	8
4	練習	8
8	楽しむ	6
8	経験	6
8	見る	6
8	大学	6
12	簡単	5
12	表現	5
14	いろいろ	4
14	曲	4
14	苦手	4
14	好き	4
14	指導	4
14	授業	4
14	人	4

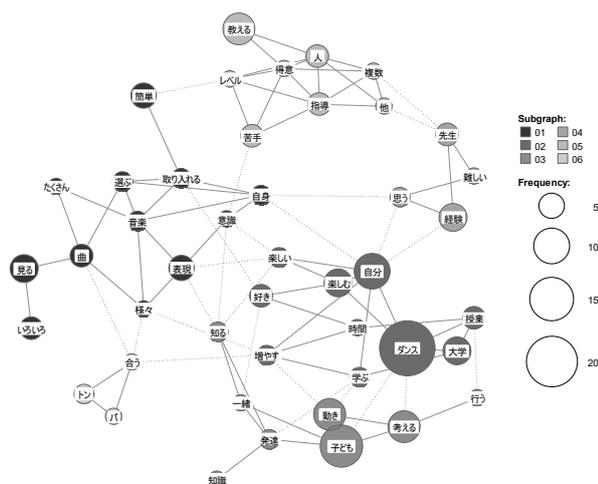


図4. 改善方法の共起ネットワーク

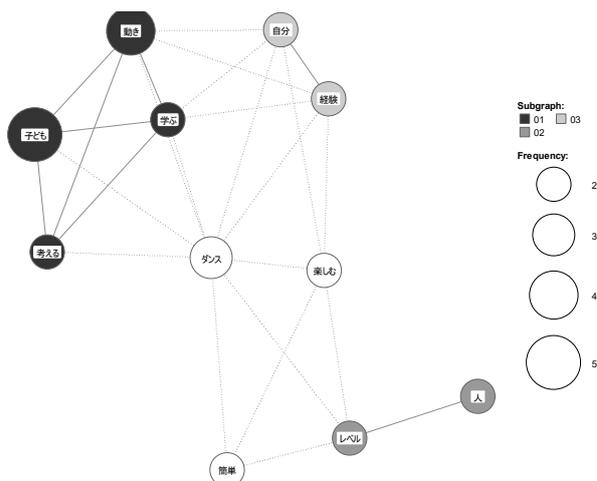


図5. 改善方法の共起ネットワーク（ダンス経験有り群）

識をもつ、日々の子どもの様子をしっかりと見ておく」「子どもの発達についての理解を深めたり、子どもの好きなものについて知ろうとする」といった記述がみられた。

(2) ダンス経験による改善方法の構造の違い

1) ダンス経験有り群

ダンス経験有り群において、出現回数が多かったのは、1位「子ども」(5回)、2位「動き」(4回)、3位「ダンス」(3回)であった(表5)。共起ネットワークを用いて抽出された語の関連性について確認したところ、「子ども」「動き」は「学ぶ」「考える」に繋がっていた(図5)。これらの語は、子どもの理解に即した動きを大学で学び、考えることが改善策になるといった回答においてみられ、具体的

には、「子どもたちと一緒に考える。」「子どもを観察して、できる動きを考える。」「大学で子どもの身体の発達や、やりやすい動きを学んでいく。」といった記述がみられた。

2) ダンス経験無し群

ダンス経験無し群において、出現回数が多かったのは、1位「ダンス」(21回)、2位「子ども」(9回)、3位「自分」(8回)であった(表6)。抽出された語の関連性について、共起ネットワークを用いて確認したところ(図6)、「子ども」は「考える」、「自分」は「楽しむ」に繋がっていた。これらの語は、子どもの興味関心を尊重し、子ども自身が楽しめるように子どもに応じた動きを考えること、そして、自分自身がダンスを楽しむことが改善策であるという回答の中で見られ、「自分が難しいと思った部分のダンスは子どもにとっても難しいかもしれないからあらかじめ要点を決め、教え方を考えておく。」「すべて保育者の考えたダンスをさせるのではなく、園児自身が好きな動きを取り入れられるようにする。子どもがとりやすいリズムや音楽を選んだり、まねしやすい動きを取り入れるなど、子どもを第一に考える。」、「自分」「楽しむ」の語については、「ダンスを楽しいと思えるようにする、自分がダンスを楽しむ」、「大学生のうちに、体を大きく使って表現したり、さまざまな表現をしたりして、ダンスや表現の楽しさを知り、苦手意識をなくす」といった記述がみられた。

表5. 改善方法の頻出20語（ダンス経験有り群）

順位	抽出語	出現回数
1	子ども	5
2	動き	4
3	ダンス	3
4	レベル	2
4	学ぶ	2
4	楽しむ	2
4	簡単	2
4	経験	2
4	考える	2
4	自分	2
4	人	2
12	いろいろ	1
12	バリエーション	1
12	一緒	1
12	観察	1
12	教える	1
12	曲	1
12	苦手	1
12	繰り返す	1
12	見る	1

IV. 考察

本研究の目的は、保育学生を対象に、ダンス指導の困難さと改善方法についての認識に、ダンス経験の有無による違いがみられるかを明らかにすることであった。テキストマイニングを用いた分析の結果、ダンス経験のある保育学

表 6. 改善方法の頻出20語 (ダンス経験無し群)

順位	抽出語	出現回数
1	ダンス	21
2	子ども	9
3	自分	8
4	教える	7
4	練習	7
6	考える	6
7	見る	5
7	大学	5
7	表現	5
10	楽しむ	4
10	経験	4
10	好き	4
10	授業	4
10	先生	4
10	動き	4
16	いろいろ	3
16	トン	3
16	音楽	3
16	楽しい	3
16	簡単	3

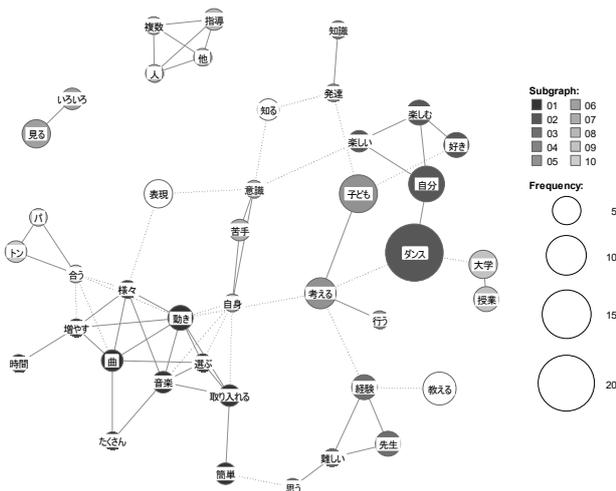


図 6. 改善方法の共起ネットワーク (ダンス経験無し群)

生は、将来、自分がダンス指導をするにあたり、子どもの年齢、発達段階、特性に応じたダンスの動きの指導や振り付けの考案について困難さを認識しているのに対し、ダンス経験のない保育学生は、自分自身の苦手意識が子どもに伝わる不安、子どもの発達に応じた指導技術や指導方法を考えることについて困難さを感じていることが明らかになった。同様に、改善方法におけるダンス経験の有無の違いを分析したところ、ダンス経験のある保育学生は、子どもの理解に即した動きを大学で学び、考えることが改善策になると認識しているのに対し、ダンス経験のない学生は子どもの興味関心を尊重し、子ども自身が楽しめるように、子どもに応じた動きを考案すること、そして、何より自分自身がダンスを楽しむことが困難さの克服に繋がるとの考えが示された。以下、ダンス経験の有無という学生

のタイプに応じた、保育者養成校としてのダンス指導の在り方について論じる。

(1) ダンス経験のある保育学生へのダンス指導

ダンスの動きや振り付けを考える際、子どもの年齢や発達段階、特性を考慮する必要がある。本研究では、ダンス経験のある者については、こういった子どもの発達や特性に応じたダンスの動きや振り付けの考案に困難さを認識する傾向にあることが示された。

中学校教員のダンス指導不安にダンス指導経験の有無がいかに関連するかを検討した山口・正田ら (2017) <sup>14)</sup>によると、ダンス指導不安は、①生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安、②教員自身の知識に対する不安、③教員自身のダンス技術に対する不安、④生徒のレベルやニーズに対する不安の4つに大別される。ダンス経験のある保育学生が、ダンス指導において認識する困難さは、これら4つのうち、④生徒のレベルやニーズに対する不安と類似しており、山口らによると、このタイプの不安感やダンス指導経験の有無と関連しない。本研究結果と山口らの見解をあわせて考えると、子どもの特性や発達に応じたダンスを考案することにおける困難さは、自分にダンスの経験があっても、子どもに教えることを意識した時に初めて生じる感情であり、ダンス指導を経験したからといって解消されるとは限らないといえる。

このような困難さを解消する手立てとして、ダンス経験のある保育学生は、子どもがどのような動きが出来るのかといった子ども理解を深め、子どもに応じたダンスの動きを考えることが有効であると捉える傾向にあった。廣兼・梶谷ら (2020) <sup>15)</sup>が中学校保健体育教員を対象に開発した研修プログラムでは、ダンス指導の導入に用いる教材として、情意・運動・認識の観点の3類型を設定している。具体的には、ダンス学習に対する情意に関する学習内容については「アイスブレイク型」、ダンスを行う際に求められる運動感覚づくりに関する学習内容については「運動感覚育成型」、ダンスを創作する際に用いる空間、時間、力性を構成する原理を理解し身につけるための学習内容については「構成原理育成型」に振り分けられる。ダンス経験のある保育学生の困難さを解消させる改善策は、これらのうち、アナログを用いて学ばせたい運動感覚を育てることを目的とした「運動感覚育成型」であるといえる。アナログとは、習得目標となる動きに類似した運動を指す言葉として用いられている。廣兼・梶谷らが考案したダンス授業の各教材の主なねらいとして、「アイスブレイク型」は、心身の緊張をほぐし、学習者同士のコミュニケーションを促すこと、「運動感覚育成型」は、アナログを用い、本時において学ばせたい運動感覚を育てること、「構成原理習得型」は、ゲーム的要素を入れる際に、ゲームのルールに構成原理を仕組み、本時において学ばせたい構成原理

を習得させることと措定している。保育学生が、子どもの発達や特性に応じた動きを学び、子ども理解を深めて困難さを解消しようとしているという本研究結果を踏まえ、廣兼・梶谷らが考案したダンス授業の各教材を活用した場合、実際の保育学生への指導としてどのようなことが考えられ得るであろうか。まず、身体の発育発達の観点から子どもはどのような動きが可能であるのか、習得目標となる動きに類似した運動、すなわちアナロゴンを用いて年齢に応じた動きを学習していく必要があると考えられた。そこで、廣兼・梶谷らが考案したダンスを行う際に求められる運動感覚を育てることを目的とした「運動感覚育成型」を活用することは有効であると考えられる。その際に、保育現場における実際の指導場面の映像を積極的に活用し、保育学生が子どもの様子や動きを観察し、理解することで、子どものダンス姿のイメージ作りが可能になると考える。子どもの発育・発達に即した「運動感覚育成型」の学習を通して、学生が頭の中に子どものダンス姿をイメージすることが出来たら、次に模擬保育などの指導場面を設定し、学生同士で他者との応答、他者とのやり取りを重ねて、子どものダンス指導の技術を磨いていく。幼稚園教育要領解説では、「教師は、幼児がお互いの活動を見たり聞いたりして相手の表現を感じ取れるように、(中略) 幼児の心に寄り添いながら適切な援助をすることが大切である<sup>16)</sup>。」と明記されている。よって、学生同士で子どもにどのように向き合うのかという課題のもと、相手の表現を感じ取り、寄り添うことを意識した指導経験を踏む段階的な指導が必要であると考えられる。

## (2) ダンス経験のない保育学生へのダンス指導

ダンス経験のない者に関しては、自分自身がダンスに対して苦手意識を抱えていること、子どもへのダンスについて考えることに困難さを感じていることが明らかになった。先述した山口らの示す中学校教員のダンス指導不安に関しては、①生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安と、②教員自身の知識に対する不安について、ダンス指導経験による違いが確認されており、ダンス指導経験のない教員ほど、生徒がダンスを楽しむこと、生徒のモチベーションを高めること、そしてダンスに関する知識の少なさに不安を感じる事が分かっている。しかし、本研究結果からは、ダンス指導はおろか、ダンスそのものの経験がない者については、指導対象となる子どもの心情にまで考慮が及ばず、ダンスに対する苦手意識から、ダンスについて考えることさえもネガティブな感情を抱えていることが示唆された。これは、子どもと一緒に踊るといった活動における保育学生の消極的姿勢の背景に、ダンスが不得意であるという認識が存在することを示した宮下(2011)<sup>17)</sup>の見解と合致する結果であるといえる。

ダンスに対する苦手意識が、ダンス指導における困難さ

の中核にあると捉えたならば、彼らが困難さの克服方法として、「何よりもまず自分がダンスを楽しむ」といった、表現者として期待される、ダンスに対するポジティブな姿勢の形成をあげたという本研究結果は納得のいくものである。彼らが別にあげた、「子ども自身の興味関心を尊重し、子どもに応じた動きを考案する」といった改善策は、彼ら自身がダンスを楽しむことができたその後についてくるものなのかもしれない。

では、自分自身がダンスに対して自信がもてないという課題をもつダンス経験のない保育学生に対しては、保育者養成校においてどのような指導が有効なものであろうか。まず、ダンスに対する自信をもてるように、学生同士のコミュニケーションを重視したダンスの習得により、自分自身がダンスを楽しむことが望まれる。その意味において、ダンス経験のない保育学生の養成校における学習は、廣兼・梶谷ら<sup>18)</sup>の示す授業の導入で行う3種類のうち、「アイスブレイク型」と「運動感覚育成型」は有効であると考えられる。例えば、最初に心の緊張をほぐし、学習者同士のコミュニケーションを促す「アイスブレイク型」を実施した後、アナロゴンを用い、子どもに学ばせたい運動感覚を育てる「運動感覚育成型」の実施を平行させる方法である。「アイスブレイク型」でダンスを楽しみと感ずることで、ダンスに対する捉え方や考え方が変わってくる可能性があると思われる。そして、保育学生がダンスを楽しむと同時に、どこにダンスの楽しさがあるのかを見出すことができるのではないだろうか。その見出したダンスの楽しさを子どもたちにどのように伝えるのか、ダンスを通した子どもとの向き合い方について考えるのではないだろうか。さらに「運動感覚育成型」では、身体の発育発達や運動能力といった身体に関することを自ら楽しんで学習できると考える。その過程で、身体の発育発達や運動能力といった身体的側面に関するだけでなく、情緒、社会性、認知的側面から、子どもを多角的に知ることができるようになるのではないだろうか。幅広い視点から子どもを知ることが、それを踏まえたダンス指導に深みを持たせ、さらなる子ども理解に結びついていく。ダンスに対するポジティブな感情を基盤として、子ども理解とダンス指導といった、理論と実践の往還が成立するとき、保育学生は多少の指導不安を抱えながらも、目標をもってダンス指導に向かうことができると思われる。つまり、今、保育者養成校に求められる授業とは、何よりも「ダンスが楽しい」と保育学生が感じられることを前提とし、指導の対象となる子どもを意識した時に自信をもって子どもと向き合い、ダンスの楽しさを伝える素地を身につける授業であると考えられる。

## V. 今後の課題

本研究では、保育者を目指す大学生50名を対象に、ダン

ス（リズムダンス、創作ダンス）指導に関する指導の困難さと改善方法について検討し、ダンス経験有り群とダンス経験無し群におけるそれぞれの困難さの克服と改善方法を確認することが出来た。しかし、分析対象が1校であったため、今後、対象者と対象校を増やした検討が必要である。また、学生自身がダンスを楽しみ、子どもの動きや発育発達学習をより深めていく指導カリキュラムの作成が課題である。さらに、今回抽出した学生のダンス指導の困難さや不安感の程度に、学生のパーソナリティがどのように関係しているかについても検討をする必要があると考える。今後は、保育者養成校に所属する学生のパーソナリティ特性について着目し、ダンス指導の不安感に影響する要因について検討をしていきたい。

## 文献

- 1) 文部科学省: 幼稚園教育要領解説. 2018.
- 2) 厚生労働省: 保育所保育指針解説. 2018.
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省: 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説. 2018.
- 4) 西洋子・本山益子・岡本雅子: 保育内容 表現 からだからはじまる保育のアート－創造と表現がつながってあふれる－. 市村出版, 2018.
- 5) 前掲書1)
- 6) 片山啓子・光本弥生・西村敦子: 創造的身体表現活動の保育内容及び方法について～「リズム運動」を作ることに焦点をあてて～. 新見公立短期大学紀要, 21, 11-22, 2000.
- 7) 遠藤晶: 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について－身体表現の指導に関する困難さのアンケートの検討を通して－. 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）, 54, 91-99, 2016.
- 8) 宮下恭子: ダンス・身体表現の指導に関する研究－保育者への調査より－. 東京成徳短期大学紀要. 第45号, 67-77, 2012.
- 9) 相原朋枝・酒向治子: エイコ&コマのDelicious Movement Workshopの検討2－創造的な身体表現を引き出す言葉に着目して－. 体育・スポーツ哲学研究, 38（2）, 103-116, 2016.
- 10) 茅野理子: 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について－ダンス必修化に関するアンケート調査から－. 宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要, 36, 25-32, 2013.
- 11) 山口莉奈・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子: 体育科教員のダンス指導不安の探索的研究. 日本教育工学会論文誌, 41（2）, 125-135, 2017.
- 12) 弓削田綾乃: 幼児の身体表現に関する学生の意識の実践についての一考察. 浦和大学・浦和大学短期大学部

浦和論叢, 41, 135-146, 2009.

- 13) 宮下恭子: 学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究. 東京成徳短期大学紀要, 44, 1-16, 2011.
- 14) 前掲書11)
- 15) 廣兼志保・梶谷朱美: 中学校保健体育教員を対象にしたダンス指導の研修プログラム開発～教材理解の促進に焦点をあてて～. 舞踊教育学研究, 21, 13-25, 2020.
- 16) 前掲書1)
- 17) 前掲書13)
- 18) 前掲書15)